

戸山サンライズ

2016年

春号

特集

着飾って街へ出よう!

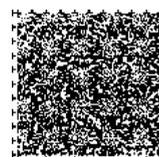


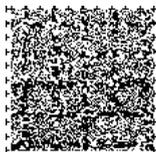
スポーツ
外へ出よう!

〜視覚障害者登山のすすめ〜

レクリエーション
障害者と共に

ヴォイストレーニング





←これは、SPコードです。
専用読み取り装置の使用により、誌面の内容の音声出力が可能です。

第30回障害者による書道・写真全国コンテスト

写真部門 金賞 「大物捕らえて」

兵庫県 金田 廣一

(作品PR)

良く整備されている公園で広い池を囲む小高い山が、カワセミの営巣地らしく1時間に2～3回採餌のために池に飛来する。来園者が多く驚かさないうせいか、人々を見ても逃げない(20mくらいでも)。望遠レンズを通してカワセミの美しい容姿を見たときの感動は今も忘れられない。夢中で写した1枚です。

(寸評)

餌の魚を捕らえて得意げなカワセミの姿が望遠レンズで的確にとらえられていて、素敵です。



このコンテストは、障害者の文化活動等の推進を図ることで技術の向上、自立への促進並びに積極的な社会参加を目的として、(公財)日本障害者リハビリテーション協会(全国障害者総合福祉センター)の主催により毎年開催されているものです。第30回を迎えた今回のコンテストでも、全国各地より227点(写真部門)にのぼる素晴らしい作品がよせられました。

目次

2016年春号

■特集：着飾って街へ出よう！

着飾って街へ出よう！

～障害者のファッション事情～—————小澤 洋子 1

オシャレして、街へ出かけよう！—————赤川 若菜 4

こだわりを大切に—————野田 拓郎 7

■レクリエーション

障害者と共にヴォイストレーニング—————松原 徹 10

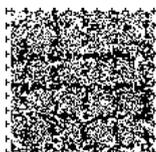
■スポーツ

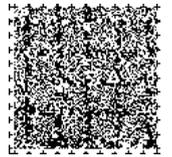
外に出よう！

～視覚障害者登山のすすめ～—————六つ星山の会 13

■ライフサポート

「社会保険Q & A」—————高橋 利夫 17





着飾って街へ出よう！ ～障害者のファッション事情～

グループカーム
代表 小澤 洋子

◇一人ひとりのニーズに応える物創り ～グループカームの誕生～◇

ボランティアで重度の男の子さんの家に伺った時のことです。「養護学校へ通うのに雨の日はレインコートで困っているんです。既製品はこのがかぶると車イスの車輪をこすって泥だらけになってしまうので何とかならないでしょうか」とお母様が言われました。成程、既製品は多くの人に合うように作られているけれど、それが合わない人は我慢するしかないのだ。大量生産の世の中では苦勞しておられる方が意外に多いのだということに気がつきました。

工夫して物創りをするのが好きだった私は、自分の仕事としてこういう方のための個々のニーズに合わせた物を創る道を迷わず選んだのです。そしてグループカームが生まれました（1983年）。以来33年間、沢山の方々とふれ合い、多種多様なご注文に応じてきました。そして大きくて深いものを学ばせていただいています。

その中で感じたこと、考えたことを述べつつ、衣類、装うことがハンディを持つ方々にとって如何に多大な力になるか事例をあげながら進めていきたいと思ひます。



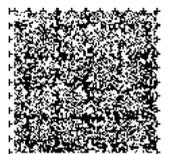
◇まゆみさんの成人式◇

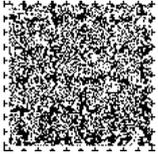
20年程前のある日、八王子の方からお電話があ

りました。「娘の成人式にどうしても着物を着せてやりたいのですが…」とのこと。高校の時に手術ミスで車イス生活になり、殆どしゃべれない身になってしまいました。和服は無理、仕方ないから布団に寝かせて上に着物を拵げてかぶせるしかないという人がいると聞いて、それは無い！と思い早速仕事場に来て頂きました。

ご両親、叔父、叔母様もご一緒にカームの手持ちの振袖（心ある呉服屋さんが提供してくださった物）を何枚か着てみて頂きました。鏡に映った自分の姿を見たときまゆみさんはニコッとそれはうれしそうな笑顔でした。勿論一番いい顔を見逃さず着物が選ばれました。赤と白と黒に大胆に染め分け、豆絞りで柄にした豪華な振袖です。着物は二部式に、帯も『つけ帯』にリフォームして車イスでも楽に着られるようにしました。

お祝いの当日は朝から美容院で着付けをし、神社でお参り、自宅でのパーティーの間もずっとしっかり持ちこたえられたそうです。美しく装っている悦びと緊張感のなせる業でしょうか、この思い出は本当に宝物だと今でもお母様が事ある毎に言ってくださいます。この仕事をしていて良かったという思いと続けることへの大きな原動力になった経験でした。





◇こんなおしゃれがしたかった◇

小平市には市民学習奨励学級という制度があります。市民グループが自主的に学習活動を企画運営し、市は活動場所や講師謝礼、資料代、広報などのサービスを提供するというものです。

障害のある人もない人も共に学ぶ会「JOIN」の佐藤さんという方から「衣生活の向上に関する学級を企画し審査にパスしたので講師として来て欲しい」という依頼がありました。場所は小平市公民館。皆さんは昼間仕事があるので夜6時半からの活動です。テーマは「こんなおしゃれがしたかった」。月1回、5回シリーズで計画を立てました。

第1回 あなたはどんなおしゃれをしていますか

- ・衣服に関する悩み、問題
- ・自分に似合う色を見つける

第2回 思いっきり変身しよう！

- ・お化粧、ヘアメイクに挑戦

第3回 ハンディがあってもおしゃれ

- ・工夫次第で道が開かれる

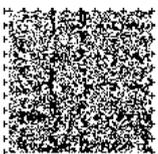
第4回 ワンポイントのおしゃれ、カラーコーディネイト

第5回 さあ、今日はファッションショー

1回目はまずグループに分かれて自分達の衣服に関する悩み、問題を出してもらいました。

- ・スカートがはきたい
- ・小物を使ったワンポイントのおしゃれを学びたい
- ・車イスの雨具で困っている
- ・防寒着、特に下半身の防寒具が欲しい
- ・正装のもの（スーツ）がない
- ・着脱の楽な工夫を知りたい
- ・胴に合わせて買うと袖が長すぎる
- ・体形のカバーの仕方
- ・座位で楽にトイレ操作のできる工夫
- ・ボタンがはめにくい
- ・お母さんが服を買ってくるので、自分で決めて買ってみたい

各々切実な問題が提起されました。その中でも私が一番感じたのは大人になっても親御さんが衣服を買って



きて与え、ご本人の希望や自立心が叶えられないということです。

次に自分に似合う色を見つけるというところでは、やはり障害を持っていることで基本的に皆の着ている服の色がなるべく汚れが目立たない地味な色が多く、形もとりあえず着脱しやすい物という傾向でした。

そこで持って行った種々の色の布の中から自分の好きな、似合うと思う色を取りあげ胸にあててもらいました。するときれいな明るい色を選ぶ人が結構いて、似合うと自分で思っている色と皆の意見が違っていたり、潜在的な憧れの色がわかったり、まさに色を愉しむひと時でした。

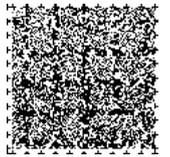
2回目は本職の美容師さんと化粧品会社の方による大変身が始まりました。髪を全部三つ編みにしてもらった女性、ショートカットをツツンに立ててもらった男性、カラスプレーで青い髪になった少し年配の女性（その晩はシャンプーをしなかったそうです）

達を筆頭に、全員がお化粧の仕方を学びました。最初はおそるおそるだったのが段々鏡の中の自分に見入って華やいだ声が飛びかう始末。最後にとても無口だったお嬢さんが車イスをこいで前に出て「きれいになってうれしかった！」と叫んだのには流石に驚きでした。



3回目はハンディに合わせて工夫した衣類を実際に身につけてみました。ちょっとした工夫で自分がだめだと思っていたことが可能になり、車イスの座位でもすごく楽だということが実感できたようです。早速お母さん達は型紙のとり方やリフォームの仕方を習得して帰られました。

4回目は小物を使って装いにアクセントをつけることを学んだのですが、この頃になって参加者の様子に変化が現れてきました。最初に較べて明らかに自分の身なりに関心を持って積極的に実行しはじめたのです。赤いバンダナを首に巻くのも恥らうことなく、男性も自分はおしゃれとは関係ないという殻が破れて着ている物が違ってきました



た。おしゃれをたのしむ気持ちが皆の中に漂っていました。

5回目のファッションショーが会場の都合で3か月先になり、そのお陰でじっくり準備ができることになりました。さあ、それからが大変です。夜遅くまで何度も会合を重ね、JOINの人達を中心に一般市民の方々がさりげなくボランティアでお手伝いしてくれるというまさにJOINそのものでした。ファッションショーで何を着たいか各自が希望を出し、それが全員実現できたのです。ロングドレス、振袖、ウェディングドレス、南米の民族衣装、野球の古田選手、車イス用レインウェア、防寒コート、ジーンズ上下…もう何でもありの約30人の衣装です。

本番ではすばらしい舞台監督ぶりを発揮して下さったスタッフのもと全員がそれは生き生きと楽しんでパフォーマンスをやりとげました。このことはずっと後までも心に残るものとなっているようです。講座とファッションショーをきっかけに、それまで親任せだったのに自分から美容院に行き髪型も服装も自分で決め、人ともしゃべるようになった人もいます。あれ以来買い物に出掛ける時も服装を気にかけるようになったと感想文に書いた男性もいます。ステージに立って人前で自分を見せるということが大きい自信につながり日常生活まで変えさせてしまうきっかけになったのだと思います。



◇おわりに◇

さてこのような楽しい経験をし、少し苦勞もしてさまざまな要望と取り組んできた年月の中でどういうことを心掛けてきたか改めて考えてみました。

- ・本人の個性、好みを尊重する。自分がそれを身につけてうれしいと思ってもらえる物、その人らしさを大切にする。
- ・本人の能力が最大限発揮できるよう工夫する。

生活の向上、意欲につながり、生活の中のリハビリにもなる。

- ・種々の工夫を施してもそれができるだけ普通に見えるようにする。
- ・こちらの考えを押しつけることなく、あくまでも本人と一緒に考えてみる。
- ・少し使ってみて頂いた頃に具合を訊ね、悪い所があれば手直しする。
- ・本人が自分で選んで買ってこられる場合は、その自主性を大切にしてそれをリフォームする。
- ・採寸、仮縫いの時は本人は緊張するので冗談などで気持ちをほぐし疲れさせないようにする。
- ・初めてお会いする方にはまず親しみをもって接し、よい人間関係をつくって相手が心置きなく状態の説明、希望などが言える場をつくる。

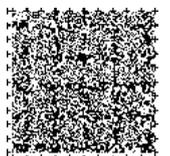


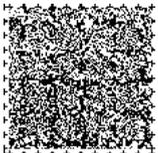
こうしてみると全く当たり前のことばかりです。でも何年もお付き合いして、ご希望の物を提供して喜んで頂ける幸せは何物にも代え難いです。

今はハンディがあってもどんどん社会に進出して活躍しておられます。ただそれを受け入れる社会構造がソフトにしるハードにしるまだまだの感があります。

そして私が一言いいたいのは介護保険が施行され、対象になっていない衣類に関しては介護者養成講座、福祉関係の学校のカリキュラムから項目が大幅に削られ、当然公的な催しにも取り上げられなくなってしまいました。福祉まつりでのファッションショーなど各地で行われ衣生活が前向きになり自立につながる教科も効果を上げていたのにとっても残念です。

ただおしゃれをして外出するのではなく、根本的な所をふまえて躍進して行って頂きたいと切に願うばかりです。





オシャレして、街へ出かけよう！

NPO 法人地域生活センター職員

赤川 若菜

みなさんは街の中で、障害がある方を、見かけたことはありますか？その時、どんな思いを抱きますか？・・・大変そう、何か、お手伝いが必要なんだろうか？どこに行くのかな？・・・そんな心配がよぎる方も、いるかもしれません。

確かに、障害がある方が街に出るとき、家から外に出て行くとき、大変さが付いてまわることもあります。例えば車椅子で外に出ると、道路がでこぼこしていたり、目的地に行くまでに階段や段差があったり、混んでいるバスに乗る時は、他の乗客の視線が気になったり、歩ける方であっても、複雑な駅の中や街の中で、道がわからなくなってしまったり、買い物をしてレジに行ったけど、お金が足りなかった！、なんてこともあります。

けれど、そんな大変さを吹き飛ばすほど、外出が好きな方が多いな、と私は感じます。買い物したい、外食に行きたい、コンサートを楽しみたい・・・その目的はそれぞれですが、周りの心配を越えて、支援者と工夫を重ねて、外出に備え、目を輝かせて、外の世界を楽しみます。家の中と

はまた違う表情に、こちらが驚かされたり、大切なことを教えてもらっ

たような気持ちになります。

そんな、外出を楽しんでいる姿や、支援者と重ねる工夫を、いくつかご紹介したいと思います。

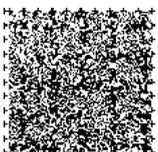
1. オシャレして出かける喜び

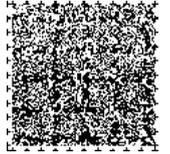
～自分の希望する外出の実現

車椅子のYさんは、歌が大好きで、普段も作業所の合唱プログラムに参加しています。一番好きなのは演歌で、自分が暮らすグループホームの部屋で、CDをかけて大熱唱するのも、気持ちがスッキリする日課です。

そんなYさんが、年に数回楽しみにしているのが、コンサートに出かけて、歌手の方の生の歌声を聞いたり、大好きな歌手の方と握手したりすることです。

コンサート当日は、オシャレな服に身を包み、周りの方の「Yさんステキ！似合うね！楽しんできてね。」の見送りに、少しはにかんだ笑顔で出発され、外食をしてから、コンサートを楽しんで、帰宅します。帰宅してからは、大興奮で、歌手の方と握手して、とても嬉しかったことを話したり、買ってきたCDを、大事そうに見せてくれます。





また、Ｙさんが通う作業所では、毎年年末に納め会が行われ、作業所のメンバーさんとスタッフが、正装してレストランで食事をします。みなさん、この日をとても楽しみにしていて、自分なりのオシャレをして、仲間と一緒に、一年を締めくくる大事な日を、過ごしています。

2. 外出を表現に

～自分の発見を表す

電動車いすのＳさんは、支援者と一緒に外に出て、自分のカメラでいろんな写真を撮る外出を好みます。Ｓさんは、電動車いすを操作できるほど、手は動きますが、発語と言葉の読み書きが難しく、周りの方とは、ジェスチャーと絵や写真でコミュニケーションを取ります。

写真は、自分の見た印象を、他の人と共有して残しておける、貴重な媒体です。

言葉が難しい障害の方が、外で感じた自分の発見や喜びを、写真という形で表すこと、それは多く好まれている方法だなど、感じます。

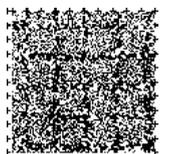
ちなみにＳさんは、自分が写した写真を、支援

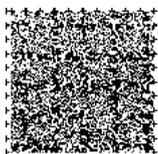
者と一緒にパソコンで編集しながら、さらにコミュニケーションを広げています。

3. 雨の日の工夫～世界に1つだけの、自分のカッパを使う

車椅子の方が外出を計画したけれど、当日雨が降ることも、当然あります。大雨じゃない限りは、何とか出かけたいですよね。けれど、車椅子だと傘をさしても、足がぬれてしまうし、市販のカッパを着ようとしても、人によっては着たり脱いだりするの、とても大変だったり、車椅子と体の隙間に雨が入り込んで、だんだんと体がぬれてきてしまったりします。ポンチョを使う方もいますが、ポンチョの端が、車椅子のタイヤに巻き込まれたりして、危険な場合もありますし、やはり足先までは届かず、ぬれてしまうことが多いです。

では、どうしたら良いでしょうか？・・・そのハードルを克服してきたのが、自分の車椅子専用のカッパです。自分の車椅子専用のカッパがあれば、雨の日でも、快適に出かけられるのです。





自分の体や車椅子のサイズを測ってもらい、自分の障害に合わせて、使いやすいカップをオーダーします。例えば、体の変形が強く、着脱に苦勞する方であれば、車椅子ごとの上下一体型であったり、首元のチャックは、手が使える方ならば、中から閉められるようになっていたり、その工夫は様々な及びます。オーダーして作る手間はかかるけれど、一度作ってしまえば、それは、雨の日でも気軽に外に出かけられる、大切な必需品になります。

Kさんは、新しく自分のカップをオーダーしました。Kさんは、身体と知的に、障害を併せ持ち、発語が難しい方です。普段は、近くのスーパーへ、スタッフと買い物に出かけたり、時にはヘルパーさんと、東京まで、ミュージカルを見に行き、手をたたきながら、楽しさや喜びを表現しています。



たり、探したりすることも、また楽しい時間です。それぞれの、そんな工夫やアイデアを持ち寄り、お互いに共有したり、工夫を楽しむ空間として、福祉機器展が存在してきました。今や、とても大きな会場で、ビッグイベントに成長しています。横浜では、独自の福祉機器展「よつてく」も開かれています。

どちらも、障害がある方や家族、スタッフの、「障害があっても、街の中に出て、自分の楽しい時間を過ごしたい、希望する場所へ行って、自分の世界を広げたい」という日々の思いから、発展していったと思います。

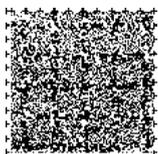
その発展の先は、障害を越えて、誰もが気軽に街の中に出かけ、充実した自分の時間を、楽しむ社会であるといいなと、思います。

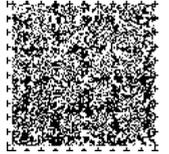
～さあ、街に出かけよう！



4. 工夫を探しに～福祉機器展そして、日々へ

障害ある方が街に出て、自分の希望する外出を楽しむ時、そこには大変さと対をなす工夫があります。その工夫を考え





こだわりを大切に

野田 拓郎

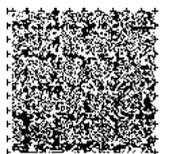
私とグループカームの小澤さんとのかわりは今から30年も前に遡ります。筋肉が萎縮して体が動かなくなっていく難病をもって生まれた私は、小学生だった当時から車いすでの生活をしていましたが、身体の変形により既製のズボンが合わなくなっていました。また、姿勢のズレを直すため介護者にズボンをもって後ろから引っ張り上げてもらっていましたが、その度にズボンが上に捲れてきて足の付け根に食い込み、その痛みで悩まされていました。そんな中、「障害者の方に身体に合った衣服を作ります」という小さな記事を母がタウン誌で偶然にみつけ、電話をかけてみたところ、小澤さんがおひとりで自宅に訪ねて来て下さいました。こちらの希望を聞いて採寸して帰られた小澤さんはすぐにご主人の古ズボンをリフォームして試し用のズボンを届けて下さり、実際に私が試着して生活の中で使ってみた後に、改めて改良を加えたズボンを作って下さいました。これが小澤さんとの最初の出会いであり、自分に合わせた自分用の衣服を作ることができた最初の瞬間でした。本人にとっても履いていて楽に生活ができて、介護者にとっても履かせやすく、それでいて見た目も普通のズボンと変わらないから「障害者用の特別なもの」であることを意識しなくてすむ。この明るくておしゃべりなおばさんは、自分のいうこともちゃんと聞いてくれるし、すごく便利なズボンを作ってくれるし、すごい人だな、と子ども心に感心したことを憶えています。

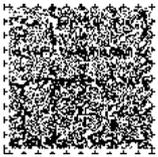
その後も事あるごとに小澤さんやグループカームのみなさんのお世話になってきました。

高校入学の際には詰襟の学生服が必要になりましたが、巷の学生服を取り扱っているコーナーでは私の身体に合ったものが作れる訳もなく、重くて堅い学生服の生地では手を自由に動かすのも困難でした。軽くて伸縮性があって手を動かしやすい素材選びから始まり、もちろんその高校の制服のボタンやデザインはそっくりそのまま再現してもらって、見事に出来上がった自分の学生服を見たときの喜び、そして、みんなと同様に詰襟を着て入学式に参加できたときの安心感と晴れ晴れしい気持ちは、新たな生活を始めていくうえで、小さいけれど確かな後押しになっていたと思います。卒業式まで3年間着通したこの学生服は、今でもたくさんさんの思い出の詰まった宝物になっています。

大学生になって直面したのは「私服」という問題でした。

高校までは学生服と家の中で着る適当な洋服さえあれば取り敢えず過ごせたのですが、大学のキャンパスでは毎日着ていく服装が自由なだけに、私服をどうするかで困りました。当初はブレザーとスーツのズボンのセットで通していましたが、やはりもっと普通のカジュアルな服装をしたいと思い、とりわけほとんどの友達や学生がジーンズをはいていたので、自分もジーンズをという希望を持っていました。健常者でもジーンズは堅くて重くてはきにくいだから絶対無理だと家族からも言われ、いくら小澤さんのところでもジーンズのズボンを作ることは無理だろうなと半ば諦めつつ相談したところ、市販されているジーンズを買ってきて、





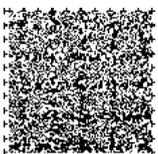
それをリフォームすることで対応していただけることになりました。1日中車いすに座った姿勢のままなのでポケットなどの余分な部分をすべて取り除き、体形に合うように胴回りなどを大幅に形も変えて、自分でも無理なく履けるジーンズにしてもらうことができました。

その後はジーンズとシャツやセーターを組み合わせることで毎日の私服の問題も解決。さらに驚いたことに、ズボンをもって後ろから引っ張り上げてもらう際に、ジーンズ地の質感がコシがあって力が入りやすく、シワになりにくいのでお尻がずり落ちてこない、という利点をもっていることがわかり、思いがけず自分に最適なズボンの素材を見つけることができました。

電動車いすに乗って外出できるようになってからは、屋外で使用するときには便利な服飾品や道具も作っていただいています。なかでも重宝しているのが、電動車いすごとすっぽりかぶれるレインコートです。一般に車いすでは雨の日の外出が厄介ですが、自分の場合は本人がレインコートをいちいち着るのがただでさえ大変で、そのうえ、電動上肢装具などの付属の機器を電動車いすに搭載しているので、車いすを雨に濡らすわけにもいかず、極力雨天の外出は避けていました。



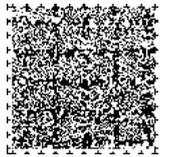
電動車いすごとかぶるレインコートのお陰で、普段と同じ姿勢で座ったまま全体を覆うことができるので



着脱が大変簡単にでき、車いすごと完全に雨に濡れずにすむようになりました。レインコートを携帯していれば、それまでだったら「途中で雨が降るかもしれない天気だからどうしようか」と外出を迷っていたような場合でも、何の躊躇もなく出かけられるようになりましたし、どしゃ降りの競技場で大好きなサッカー観戦もできるようになりました。このレインコートを作る際には、通常の色が付いた防水の生地で車いすごとかぶせると、大きな物体のなかに顔だけ浮かび上がって不気味な印象になってしまうため、透明のビニールの部分を多くとり、中に人間が座っていることが一目でわかるように工夫していただきました。ほかに、外出で自動車に揺られるときに頭が降られてぶつかっても痛くないようなカバーや、自分の大きなサイズの頭でもかぶれる帽子（キャップ）などもお願いしました。

近頃では生活の中で在宅の時間も増えてきましたが、ベッドをギャジアップして座位が保てるように工夫した二分割のベッドマットに、うまく掛けられるようなシーツも考えていただきました。

以上のように、これまで小澤さんに作っていただいていた物を振り返ってみると、それが自分の生活の変化をそのまま辿っていくことになるということに気が付きます。ハンディキャップを持った生活の中では、不便なことや、もっとらくに快適にできないだろうかと感じる事が多々ありますが、「こういう物があれば解決できるのではないかな」と、ふとした拍子にひらめく瞬間があります。次に、それではどうやったらそのアイデアを具体化し実現できるだろうかという段階で、小澤さんをはじめとした専門家の方々、リハビリ工学やエンジニアや福祉機器業者さんなどに相談し、方法を検討して自分に合った物を作り上げていただく。その結果、それまでできなかったことや諦めていたことが、自分でできるようになる。それが実現したときの全身から沸き上がる喜びと感動は、それを上回るものがないというぐらい人生の中でも最高のものでした。これまでの生活を振り



返ると、節目節目で、この繰り返しを経験してきたように思います。

また、「こういう物が必要だ」というニーズ、「こんなこともやりたい」という欲求は、年齢を重ねていく間に、生活環境が変化していく中で、その都度その都度新たなものが芽生えてきます。自分に合った洋服や道具ができて生活がひとつ快適になると、それで終わってしまうのではなく、その快適になった生活をベースにすることで初めて、

また新たな次のニーズや欲求が生まれてくる、ということがよくあります。そういう連鎖のなかで多くの人に関わり助けていただきながら生きてこられたことに、改めて感謝したい気持ちです。



病気や障害と共に生きていくなかで、特に進行性の病気である場合には、身体の衰えや自分ではできなくなる物事が増えていくにつれて、自分の「こだわり」を貫き通すことが困難になって妥協していかざるを得ないような状況、言い換えれば「こだわり」を捨てていかななくてはならない場面が、どうしても多くなっていくと思います。その点では、小澤さんに衣服を作っていた際に、ちょっとしたデザインや色などにこだわって、自分の望み通りの「こだわりの服」を手に入れることは、単に自分に合った快適な機能的に優れた物であるだけではない、大きな意味があると感じています。

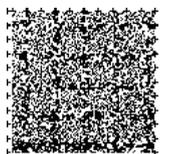
見た目の工夫や格好良さは、とにかく福祉の分野では二の次にされがちですが、自分のこだわりをもった物を身につけているという満足感は、他人と接し、人間関係を広げていく際に、自分を前向きに開放的にしてくれるような気がします。私はお世辞にもおしゃれのセンスを持ち合わせて

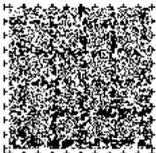
いるとはいえ、むしろ縁遠い方の人間ですが、気管切開をしている関係でいつでも素早く襟の開け閉めができるようワンタッチで着脱可能にして、上半身の丈に合わせて大胆に短くセットされたネクタイを自分の好みの柄で小澤さんに作っていただき、スーツを着るような場面では必ず締めています。ほとんど装具で隠れてしまって外からは見にくいので形だけのものですが、それでも気分が変わります。

小澤さんの特に素晴らしいところは、そういう小さな「こだわり」をそのまま普通に受け入れて尊重していただけること、そして「どうしてこんな要望が出ているのか」を本人の立場に立って誠実に受け止め理解されることだと思います。「何もそんな面倒なこだわりはもたなくても」とか「そんな見た目なんか取り敢えずどうでもいいじゃないか」などと一笑に付されてしまいがちなことでも、「なるほど!」とまずうなずいて、それを実現させるためにはどうすればよいかを一緒に考えてくださる。このとき、無意識のうちに自分自身の存在が受け入れられていることを感じ、自然と楽しく嬉しい気持ちになれる方が多いのではないのでしょうか。



最近お世話になったのは、趣味で楽しんでいる電動車いすサッカーのチームのユニフォームをリフォームしていただいたときです。これからも、新たにやりたいことができる度に、より快適でこだわりのある衣服を求めて、小澤さんのお力をお借りすることでしょう。元気で明るいパワーも一緒に分けていただきながら。





障害者と共にヴォイストレーニング

ヴォイストレーナー 岡山
松原 徹

三浦康平君

「今月も車椅子にのって三浦くんがやってきた・・・」というコーナーを我法人の機関紙「音楽の砦」に書き始めて2年が過ぎました。ここでいう三浦君とは、三浦康平君31才、中学の時に行った心臓手術の結果、二ヶ月意識が戻らず、酸素が脳にいかない低酸素脳症による高次脳機能障害の男性です。私が三浦君と初めて会ったのは10年程前、障害者デイサービスでの音楽セッション。それ以来、お母さんに伴われて個人レッスンに来るようになりました。医療人でも福祉家でもない私が、ヴォイストレーナーとして「何ができるのか？」と手探りではじめた三浦君へのヴォイストレーニング。「なぜ三浦君の言葉は聴き取りにくいのだろう？」と思いながら聴いていたら Na 行、Ma 行が特に聴き取りにくいことに気づき、小鼻を空けるようにして発音しなければならない通鼻音 N、M は顔面に麻痺がある三浦君にとって難しいことがわかりました。「それならば」と鼻の周りの筋肉を動かす準備運動の後、三浦君が好きな曲：井上陽水「少年時代」の「な (Na) 一つがすぎ かげあざみ・・・」の部分、根気よく時間をかけて練習。結果、少しずつ言葉の改善ができました。次に「なぜ音程が無いのだろう？」と思いながら聴いていたら、女性・子どものキイであることがわかりました。三浦君が障害者になったのは中学の時だから、第二次性徴でみられる変声期が無かったのかもしれませんが。とりあえず女性の歌：井上あずみの「ビリーヴ」で試してみると、予想通り、キイが合うためか音程が付いてきました。

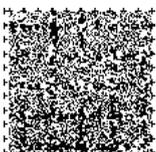
三浦君の喉

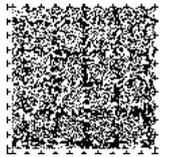
ところがどうしても改善できない

問題。それは三浦君の声に張りが無いのです。悪く言えばガラガラ声。声の張りを取り戻すために様々なカリキュラムを提供したのですが、まったく変化はみられません。もしかしたら声帯・喉頭（喉仏）に問題があるのでは？と、耳鼻咽喉科への受診をすすめました。結果、喉頭を形成する輪状軟骨の一部が折れているため左側の声帯が動いておらず、それを補ってきた右側の声帯が大きく肥大していました。そのため声帯の締りが悪く、息が漏れてガラガラ声になり、この状態は飲み込み損ねによる誤嚥性肺炎を招きかねないし、無理にヴォイストレーニングを行うことは健康上良くないことがわかりました。「ならば何が出来るのか？」と悩んでいたら、お母さんとの会話の中に答えが見えてきました。

お母さんとの話：一事が万事

三浦君は月に一度、大きな病院でのリハビリに通っており、そこで長年車椅子からの立ち上がりを始め、様々なトレーニングを行ってきました。ところが先日、担当の理学療法士から「いくらやっても大して効果は無いので、もうやめましょう」と言われ、お母さんはガッカリ。そのことを三浦君の妹に話すと「それは、その人がコーチマン(三浦君の通称)に興味がないから」と答えました。妹は兄を見て福祉の仕事につきたいと願い、作業療法士になっただけあって、その答えはなかなか射っています。確かに目を見張るような効果はないかもしれませんが、心の底から三浦くんを見ようとしたなら必ず何かが見えるはず。そして次の目標が定まり、新たな動きが生まれます。福祉に関わる者にとって何よりも大切なのは一事を見る誠実な目。そして一事を見る力があれば必ず万





事が見えてくるに違いないのです。

声帯に障害がある三浦君には、直接声のトレーニングはできません。それでも何か役に立てることはないかと思いながら、三浦君をもう一度心の底から見ることにしました。

「腹式呼吸と排尿」

歌っている三浦君を眺めていると、腹式呼吸が意外に上手なことに気がきました。腹式呼吸とは、横隔膜を引き上げる事で肺を下から押し上げて呼吸を行い、下げる事で肺が伸びて吸気を行なう呼吸法をいいます。だから呼気の際は内臓も一緒に持ち上がるので、へそ下3cmあたりの臍下丹田せいかたんでんの中に食い込み、同時に胃のあたりが前に飛び出るようになります。三浦君の膀胱は特に横に細長く、そのためか排尿時シャーっと勢いよく出ないので、時間を掛けて搾り出します。この時、三浦君に限らず男性の下腹部筋の使い方は腹式呼吸の時と良く似ています。お母さん曰く「用をたしている時は下腹あたりがペコペコ動いています」。三浦君は人一倍横隔膜を使って排尿しているので腹式呼吸が上手いのかもかもしれません。別の見方をすれば、腹式呼吸の練習は排尿・排便に関する悩みを持っている人に役に立つ？

お母さんとの会話から考える社会福祉 自助・共助・公助

社会福祉は、自らが自らを助ける＝自助、共に助け合う＝共助、公が助ける＝公助、これら三助のバランスが保たれた時に成せると思っています。決してどれか一つだけに頼るのではなく、また、どれか一つのせいにして現状を嘆いてはいけません。お母さんの話の中から三助に関する事例を紹介します。

自助に関する「助けて！が、いえるサポート」

ある障害者が、いつも傍にいないはずの母親がいなことに気づき、外に探しに出ました。結局本人が行方不明となってしまう、捜査願が出されるはめに。警察まで導入して大人数で捜した結果、田んぼ脇の用水に落ちてじっと黙って寒さにこらえていました。「どうして助けて！と言わなかった

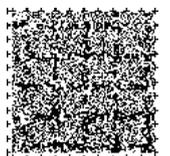
の？」と聞くと「待っていれば必ず、お母さんが迎えに来ると思っていた」と答えました。今は安全に慣れすぎて「助けて！」を学ぶチャンスがないのかもしれない。自助のための第一歩は、大声で「助けて！」という事ではないでしょうか。

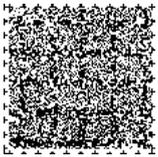
共助に関する「TSUTAYAでの出来事」

お母さんが「嬉しいことがあったんですよ」といいます。TUTAYAでDVDを借りる為、お母さんはレジに並び、三浦君は離れたところで一人モニターテレビを見ていました。その側に商品陳列棚があったので三浦君が何かを買おうとしているように見えたのか、40代の男性が「どれか取ろうか？」と声をかけ、三浦君は「いや、大丈夫です」と答えていました。お母さんと離れたところで、そんな普通の日常会話をする三浦君を見て、嬉しさと普通に声をかけてくれたその男性に対して感謝の気持ちでいっぱいでした。まさにノーマライゼーション（障害者、高齢者に関わらず、すべての人が区別なく共に住み、共に生きられるような社会を築くこと）こんな難しい言葉を知らなくてもお母さんがよく言う「やさしい気持ち」さえあれば理想の福祉社会は必ず形成できるはず。やさしい気持ちになれる社会に向けて、教育、メディア、地域、世界が一つになることこそ理想の福祉社会実現への近道ではないかと思えた「小さなTSUTAYAでの出来事」でした。

公助に関する「自身が障害者の精神科医」

三浦君が通っている整体所で出会う40歳ぐらいの男性のこと。彼は高校時代ラグビーでの事故がもとで首から下が全く動かなくなりました。しかし努力を重ねて医学部を卒業し、現在精神科の医師として働いています。ところが彼には大きな問題があります。それは職場への通勤手段。当然、自分で運転はできないので誰かに頼まなければなりません。それを高齢の母親が担っています。その上、高校時代ラグビーをやっていただけあって身長が190cm、普通の車では狭すぎるので高齢の女性には似つかない大型の乗用車に乗って。「あと何年できるだろうか・・・」と母親は言います。「福祉支





援を利用すれば？」と思うのですが、彼の場合「働いている」ため、障害者扱いにはならないらしく、もし利用すれば通勤のためだけに高額な費用がかかり何のために働いているのかわかりません。「障害者は障害者として生きていかなければいけないのか」と彼は言います。障害者であれ、健常者であれ努力している者が報われる社会であって欲しいものです。

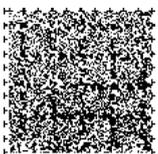
「私が死んだら・・・」

先日、障害者の友人のお母さんが亡くなりました。友人の場合お母さんも障害者で、お母さんが乗った車椅子を障害者の友人が押している、まさしく二人で一人の生活。そのお母さんが動脈瘤破裂で急死したのです。それまでは「もしお母さんが死んだら、車椅子を押さなくてすむから楽でいい」と冗談交じりに話していましたが、葬式の時「おかあさん・・・」と泣いていたそうです。その姿を見て三浦君のお母さんは胸が詰まる思いでした。亡くなったお母さんと三浦君のお母さんは同じ年。「自分が死んだら、残されたこの子はどうなる？」の現実を見るようで「とても人ごとには思えなかった」といいます。

生前、気丈に生きていたからか、息子に障害があることを親類縁者には話していなかった様子。葬儀の場で、親類縁者は「なんか、変わった子・・・」という目で友人を見ていたので「あの子は〇〇という障害があつて・・・」と、見るに見かねた三浦君のお母さんが説明をしたら「へえー、全然知らなかった」という言葉が返ってきました。

「私が死んだら・・・」のためには、まず知ってもらうこと。これは親類縁者にはかえって言いにくいかもしれませんが、だからこそ健康面だけでなく、プライベートな問題まで相談できる第三者・友人を作っておくことは必ず将来役に立ちます。亡くなったお母さんにとって三浦君のお母さんがその第三者だったのでしょう。

その後、友人はお母さんと築いた二人で一人の生活リズムを現在でも崩しておらず、洗濯、炊事など、今まで通り一所懸命こなそうとする姿に、お父さんも励まされているといいます。彼の行動一つ一つ



にお母さんは生きています。まさにお母さんの人生をかけた自立支援。お母さんは亡くなったけれど、二人で築いた生活リズムはこれからも彼を守り続けるのでしょう。

アウトリーチ

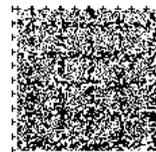
三浦君にはパラリンピックに出たり、絵、音楽などで目を引くような特技は見当たらないし、お母さんも世間に対して権利獲得のためのアピールが出来るような人ではありません。まさに一般大衆なのです。しかし、お母さんの話には万事が見えます。我子のことだけではなく、周りにいる様々な障害者、その家族の話など現実を嘆くのではない江戸時代・一般大衆の生活を描いた浮世絵的面白さ、公平性、社会性があります。だから、多くの人に聞いていただき、一般大衆的障害者を知ってほしいと思いました。

三浦君が障害者になったのは医療事故かもしれませんが。三浦君が障害を負ったとわかった時「訴訟をしよう」という話も出ました。ところが当時まだ幼かった三浦君の妹の「裁判なんていや」という一言で、人を恨んで生きることは止めたのだそうです。それから10数年、三浦家は三浦君を中心に幸福そうです。

今の社会は申し上げれば答えてくれる「申請主義」です。民・公が一般大衆を広く理解し、多くを語ることなく真面目に生きている人に対して普通に手を差し伸べる世の中、アウトリーチになっていくことこそが肝心。

私は福祉社会の実現への近道、そして「幸福とは？」を、三浦家と関わりながら学ばせていただいていると思っています。





外に出よう！ ～視覚障害者登山のすすめ～

六つ星山の会

<見えても見えなくても山は素晴らしい>

春。いっせいに芽吹く草木の香を嗅ぎ、登山道の脇に咲く草花に触れ愛でる。木の上からは小鳥のさえずり。命の躍動を全身で受け止める。

夏。濃い緑のトンネルの中を、汗をしたたらせ登る。稜線に出ると一陣の風が吹き通り、汗が一気に引き爽快感を感じる。

ある時には、山あいの小さな沢の中を歩く。ザブザブと水をかき分け、時には腰まで水に浸かり夏の暑さを忘れる。お昼は、沢のわき水で冷やしたそうめんを皆で分け合い食べる。

秋。一面に紅葉した林の中、木々の間からは高く澄み通った空がのぞき、足元には落ち葉の絨毯。歩く度にカサコソと音を立て、時々枯れ枝を踏むパキポキという音も交じる。落ち葉の吹き溜まりでは、膝までもぐる落ち葉のラッセルだ。

冬。近郊の山に登る。空気は引き締まりほほに当たる風も冷たいが、少し歩くとうっすら汗ばんでくる。葉を落とした林の中は空が明るく開放感がある。

雪に覆われた雪原の中を、スノーシューで歩く。地面のでこぼこや障害物は雪で埋められ、林の中を自由に歩いていける。転んでも平気、雪がクッション代わり。

時には、雪の高い山にも挑戦する。足元はアイゼン、手にはピッケル。吹雪く中、一步一步足元を確かめ登り、頂上に到達した時の達成感がたま

らない。

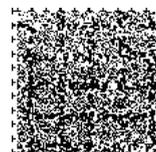
視覚障害者（以下、視障者）が山に登ると聞いた時、皆さんはどう思いますか？「景色も見えないのに苦しい思いをして山に登る意味がわからない。」或いは「登山は健常者でも危険を伴うのに、目が不自由な人が登山をするなどとんでもない。」などの意見が圧倒的に多いと思います。

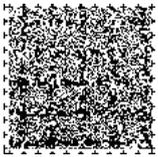
「景色も見えないのに山に登る意味がわからない。」との意見については、冒頭にも触れたように、視障者も視覚以外の感覚を通して様々な楽しみ方ができます。なにも頂上での景色だけが登山の楽しみではないのです。また、視障者は色々な制約で自然に接する機会が限られるので、自然に接すること自体が大きな楽しみになるということも忘れてはいけません。

次に、「目の不自由な人が危険を伴う登山をするなどとんでもない。」という意見ですが、視障者が単独で登山をすることは、勿論不可能ですし危険です。しかし、健常者が目の代わりとなって視障者をサポートして登れば、視障者も山に登れます。勿論、その為には、安全を担保できるサポートの方法・体制が確立していることが大前提です。

<六つ星山の会について>

1982年（昭和57年）、二人の視障者が「我々も山に登りたいので、連れて行って欲しい。」と、日本点字図書館を訪れたこ





とをきっかけに、日本点字図書館の有志が中心になって「視覚障害者と一緒に登る山の会」が結成され、第

1回山行を丹沢・大田で実施しました。翌年に会の名称を「六つ星山の会」に変更、翌々年には会則も制定されました。

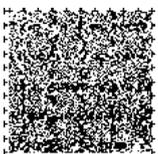
その後、サポーター（健常者）の不足に悩まされながらも、視障者の登山を支援する活動を活発に続け、その功績を認められ、1991年に厚生労働大臣から「身体障害者社会参加促進功労者」賞を受賞しました。そして、2015年末には会員数230名（視障者78名、健常者152名）を数えるまでに成長しています。

＜視障者登山のサポート方法及び安全確保について＞

当会の山行では、視障者1名の前後に健常者（サポーター）2名を配置しサポートすることを基本にしています。視障者は前サポーターのリュック（リュックに付けたロープ）の動きと、前サポーターが段差や障害物などを説明する声を頼りに登山をします。前サポーターは、安全で歩き易い道を選びながら進み、段差、障害物や危険箇所を手短かに声で知らせます。また後ろサポーターは、視障者の後方を歩き、視障者が危険な所に足を置かないよう注意し、前サポーターが説明しきれない障害物を知らせます。

当会では、入会したての健常者向けのサポート講習会、及び入会したての視障者向けの視障初心者講習会をそれぞれ年1回実施し、サポートの仕方及びサポートのされ方の訓練を行っています。

また、万が一事故に遭った時の保障のために、会山行に参加する場合にはスポーツ安全保険又は各自で山岳保険・ハイキング保険に加入することを義務付けています。



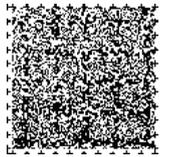
＜視障者と健常者は対等に山登りを楽しむ仲間＞

当会では、設立当初から「健常者が視障者の目の不自由を補うことがあっても、その他は全て対等かつ自己責任の下で山に登る」ことを原則としています。視障者は、健常者のリード無しには登山をすることができませんが、登山そのものは視障者自身の力で行わなくてははいけません。また、それを可能にするための準備が求められます。登山では、急傾斜の山道を歩くことが当たり前です。また、でこぼこした道、石がごろごろの道、滑りやすい道、岩場など足元が悪い所も歩きます。こうした所を歩きぬくためには、相応の体力が必要です。普段から家の中でも出来るスクワットや階段の上下などで体を鍛えることが求められます。また、「自分に出来ること或いは自分でしなくてはいけないことは、自分で行う。」という自覚を持つことも重要です。自然の脅威は障害の有無に関係なく襲いかかってきますので、視障者であっても自分の身は自分で守るしかないのです。

一方、健常者には、視障者に対し「目が不自由であることを除けば、対等で自立した個人である」ことを認識することが求められます。視障者は決して何もできない人ではありません。視障者が出来ることに先回りして手を出してしまっはけません。（総務部長 新海 吉治（晴眼者））



初心者障害者向け講習会



私の山旅紀行

私の本格的な山行は、東京教育大学付属盲学校高等部のワンダーフォーゲル部に入ってから始まりました。週末は奥多摩、奥武蔵、丹沢山ですごし、長期の休みは八ヶ岳や北アルプス縦走の日々が続きました。就職してからの山行は激減しましたが、職場の仲間達に誘われて始めたスキーは、私のアウトドアライフを大きく広げてくれ、いまなお山行とともに大切な生きがいとなっています。

六つ星山の会（以下六つ星）との出会いは、20数年前、ワンゲルの先輩に紹介されてのことでした。仕事も家庭も一段落して、山への憧れが再び強くなりはじめた頃でしたから、すぐに入会し、山行にも参加しました。それまでは、多くても4、5人のグループ山行でした。六つ星の20人を越える山行は、多少のとまどいもありましたが、健常者会員の皆さんの援助で、多くの視覚障害者との山行を楽しむことができました。また健常者会員の皆さんは、山のベテランが多く、高い山や難所のある山行でも安心して参加できるのも大きな喜びです。

私たちの六つ星は、「視覚障害者と健常者がともに山行を楽しむ」ことを理念としていますから、あまりボランティアという言葉は使いません。この点も視覚障害者にとっては嬉しいことです。「自分でできることは自分でやる」という自立した人間としての関係が大切にされていることも、六つ星が30有余年を経ても劣化せず、新しい山仲間を増やし続け、生きいきと活動できる証かもしれません。街歩きのG0（グレードゼロ）から、高山縦走のG4まで、会員の体力と技術に合わせた山行を企画し、様々なニーズに応えられるのも六つ星の魅力です。

かつて「山を思えば人恋し、人を思えば山恋し」と歌った詩人がいましたが、樹林帯の香りや鳥のさえずり、稜線を渡る風と高山の花々、時には私たちを苦しめる雨や雪でさえ、「いま私は充実して

生きている」と感じさせてくれます。山頂にたったときの達成感、無事山下山できたときの安堵感など、山の魅力は障害の有無を越えて共感できるものと確信しています。一人でも多くの皆さんが、この感動を私たちと共有していただければ幸いです。

登山ブームが再来している今日、一方では人々の格差と貧困が拡大しています。障害者が非国民と呼ばれたり、国防のためと山岳地図が発禁にされたり、基本的人権が二度と踏みにじられることなく、だれもが安心して山行と自然を楽しみ、豊かで充実した人生をまっとうできるような国であってほしいと心に深く刻む日々です。

（会長 葛貫 重治（弱視））

山の楽しみ

<生活の中のオアシス>

登山がすきというと「苦しいのに」とか「どうせ下りるのにわざわざ上るなんて」と言われることがある。

私にとって山の楽しみとはなんだろうか。

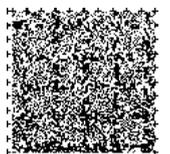
人生、必ずうまくいくと分かっていることだけをこなすより少し頑張れば達成できそうな目標があるほうがはりあいがある。

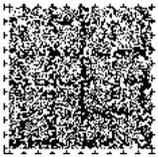
もちろん体調、天候、難易度、何かあった時のエスケープ等考慮したうえでの挑戦である。

暑い中、大雨で足元が沢のようになる中、苦しい中、登って得られた何とも言えない達成感、山でしか出会えない花や動物、珍しい現象に会えた感動は、登ってみなければ味わえない。

人がどんな状態で山に対しようとして、山はいつでも何事もなかったかのようにドンとそこにいて私たちを出迎えてくれる。

日常生活で何かあっても、その悩みがとてもちっぽけなものに思えて来る。





もちろん山でもうまく行かないこともある。時間切れで山頂まで行けない、吹雪でこれ以上進めない。でも、それも会のメンバーと一緒に新たな目標にしていくことができる。

また、山を歩きながら人生の先輩方にお話しているうちに解決策が見いだされることもある。

少し日常に疲れたとき、帰りたくなる場所、私にとってそれが山であり山の仲間なのだ。

いつしか毎週のように山に行かないと何か気持ち悪い、それがあから頑張れる自分がいたのだった。

<夢がかなう場所>

会員の共通点は山が好きということだけで、年齢も職業も山の経験も様々。山岳ガイドをされていた方、バリエーションルートに詳しい方、山菜やキノコに詳しい方、アウトドアで飛び切り美味しく豊富な料理を作られる方など、役者がそろっている。

会では季節や難易度を考慮して立てた年間計画に基づき山行を実施しているが、年間計画に留まらず、それ以上の臨時山行が実施されている。

山をかじったことがある人なら誰でも知っている山なのに山頂に着くまで誰にも会わない急登や藪漕ぎ連続のバリエーションルートや、登山口と山頂の標高差はそれ程ないのに、足元が切れ落ちている岩場のへつりや下降等岩稜帯が連続する山、そんな山やルートを教えていただくと、なんだか山を独り占めしたような少し得した気分になる。

夢を語ると、ハイキングのような山から北アルプスのような岩場の多い山まで、一緒にはなえて下さる方々がいる。

どうしても夏に比べて行ける場所が限られる冬、体力作りに東海道歩きを始めたらはまってしまい、中山

道も歩きとおしてみたくなった。ただ、ほぼ線路沿いを進む東海道と違って、半分ほどを山間部が占める中山道は、一人で歩いたり、地元のボランティアの方をお願いするには限界があった。そんな時その夢をかなえるのに一緒に歩いて下さったのが山のメンバーだった。

全長526kmを延べ16日ほどかけて夜行バスや江戸時代から続くはたごを利用し、当時の面影を感じながら歩くことができた。

他にも、谷川連峰・茂倉岳、惜しげもなく現れるブロッケン現象の後、他に誰もいない広い避難小屋でゆったり宿泊。

ニュージーランド・ミルフォードトラック、ずっと川のせせらぎを聞きながら2、3メートルの高さのシダの続くジャングルをトレッキング、日本ではお目にかかったことのないたくさんの鳥たちのさえずりに囲まれながらの最高の日々。

山菜取りに、沢歩き、クライミングに、雪山、今思い出しても鮮やかによみがえる思い出には暇がない。

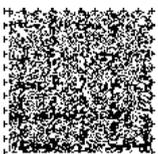
現在は子供が小さいので、高い山は行けないが、低山やちょっとした丘でのお花見を楽しませてもらっている。

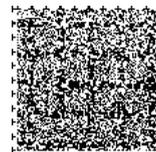
子供がそれなりに歩けるようになった際には、どんなに小さな山でも良いので一緒に歩いて登るのが目下の夢である。

登りがいのある山だけでなく、そんな夢も安全面を含め一緒に考えて下さる、そんな方がいる会なのである。 (広報担当 松元 梢 (全盲))



サポート講習会集合写真





社会保険 Q&A

(問) 障害基礎年金を受給していますが、この秋、障害の再認定となります。

2年前に障害認定について、都道府県により、地域差があると報道されていました。

このことについて、その後、どうなっているのでしょうか。

(答)

1 障害認定の地域差

平成26年8月に、「障害基礎年金の認定結果に、都道府県により、最大6.1倍の格差がある」と報じられた新聞記事が、きっかけとなりました。

平成22年度から24年度の障害基礎年金の認定で、申請件数に対する不支給判定となった件数の割合を都道府県別に比較した場合、大分県が24.4%で最多となり、栃木県が4.0%で最少であったというものです。

2 現在の認定体制

初めに、現在の認定に関する事務審査体制（日本年金機構・事務センター）をみますと、事務の流れは、①障害基礎年金のみの請求、②障害基礎・厚生年金の両方の請求の場合で異なった取扱いとなっています。

① 障害基礎年金のみの請求の場合

受付・点検を市区町村と年金請求書を進達された年金事務所で行った後、全国39か所の各事務センターにおいて、障害基礎年金の審査、等級認定及び入力等の業務が行われています。

② 障害基礎・厚生年金の両方の請求の場合

受付は、年金事務所で行い。事務センターを経由して、機構本部の障害厚生年金業務部で審査・決定しています。

3 障害年金給付業務の全国集約

機構は、27年12月に「業務改善計画」を策定し、その一環として、29年4月までに、障害基礎年金の審査、等級認定及び入力等の業務を順次東京都内1か所の拠点に集約し、障害年金給付業務の効率化、標準化（地域差の改善）を進めるとしています。

4 専門家検討会の検討結果

厚生労働省では、この問題解決のため、8回にわたる専門家検討会で『等級判定ガイドライン』の策定、『診断書の記載要領』の作成、『照会文書』の作成の3資料を使用して、対応することとしました。

5 障害年金受給者への対応

既に障害年金を受けている人に対しては、次のような対応が行われることになっています。

- ① ガイドラインを最初に適用して、等級判定を行うのは、額改定請求をした場合を除いて、ガイドライン実施後に、初めて到来する再認定時とします。
- ② 再認定に当たって、受給者の障害の状態が従前と変わらない場合については、当分の間、等級非該当への変更は行わないことを基本とします。
- ③ 下位等級や等級非該当への変更を検討する場合は、認定医は、認定に必要な情報収集を適宜行い、慎重に審査を行うよう留意することとしています。

このような対応をする時期は、この夏が予定されているところです。

これにより、都道府県別の地域格差による不公平な取扱いの解消が図られていくことが期待されるということです。

(回答：社会保険労務士 年金委員 高橋 利夫)

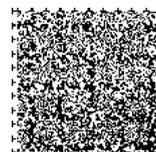
戸山サンライズ (通巻第270号)

発行 平成28年8月10日

発行人 公益財団法人 日本障害者リハビリテーション協会 会長 炭谷 茂

編集 全国障害者総合福祉センター

〒162-0052 東京都新宿区戸山1-22-1 TEL.03(3204)3611(代表) FAX.03(3232)3621
<http://www.normanet.ne.jp/~ww100006/index.htm>



ソウェルクラブ
Sowel
CLUB

会員数

25.1万人

(平成28年6月現在)

新規会員募集中

福祉の職場で
働く人を
支援しています。



福利厚生センター(ソウェルクラブ)は…

社会福祉事業等に従事する方の福利厚生を全国一括で展開し、スケールメリットを生かすことにより、個々の法人では実現が難しい充実したサービスを提供しています。

1

加入対象拡大!

平成28年4月から有料老人ホームや医療系の介護保険施設・事業に従事する職員の方々も加入対象となりました。

2

ソウェルクラブ ならではのサービス

健診費用の助成、健康生活用品給付、各種お祝品、弔慰金をはじめとした基本サービスに加え、地域密着サービス、クラブオフなど幅広いサービスを展開しています。

3

掛金はわずか年1万円/人

会員1人当たり年1万円のご負担のみで、ソウェルクラブが提供する全てのサービスが利用できます。また、サービスを一部限定した非常勤職員向けコース(年5千円)もございます。

ソウェルクラブ
Sowel
CLUB

ソウェルクラブの資料請求、加入のお申し込みは
社会福祉法人 福利厚生センター

<http://www.sowel.or.jp> 詳しくは で または、お電話でお問い合わせください。
TEL ☎ 0120-292-711 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1-3-1 NBF小川町ビル10階